

石の微笑

2007(平成19)年7月5日鑑賞〈東宝東和試写室〉

★★★★★



監督・脚本＝クロード・シャブロール／原作＝ルース・レンデル『石の微笑』（角川文庫刊）
／出演＝ブノワ・マジメル／ローラ・スメット／オーロール・クレマン／ベルナル・ル・
コク／ソレーヌ・ブトン／アンナ・ミハルシア／ミシェル・デュショール／ソワ／エリック・セ
ニエ（CK エンタテインメント、キネティック配給／2004年フランス、ドイツ映画／107分）

……ヌーヴェル・ヴァーグの巨匠として名を馳せたクロード・シャブロール監督が、70歳半ばにしてチャレンジしたのは、ファミ・ファタール映画……。ちあきなおみが歌った『四つのお願い』はたわいのないお願いだが、この映画は「誰でもいいから人を殺して」というお願いだったから大変……。美人で恐い女性が登場するサスペンス映画の大好きな人は必見！ またそうでない人も、十分楽しめること確実……。



ヌーヴェル・ヴァーグとファミ・ファタール

1950～60年代、フランス映画界に押し寄せた新しい波のことを「ヌーヴェル・ヴァーグ」と呼び、その代表はジャン＝リュック・ゴダール、フランソワ・トリュフォーそしてクロード・シャブロール監督たち。これは私が映画検定の勉強をした『公式テキストブック』200頁に書かれている。

他方、ファミ・ファタールとは、フィルム・ノワール（犯罪映画）などに登場して男を惑わせ、道を誤らせたり破滅させたりする運命の女のことで、『白いドレスの女』（81年）のマットらがその代表格。これも『公式テキストブック』191頁に書いてあるとおり。

1950～60年当時のヌーヴェル・ヴァーグ運動は、映画雑誌『カイエ・デュ・シネマ』に拠っていた映画評論家出身の監督が中心だったが、当時彼らは20～30代の若手。しかし、その中の1人だった1930年生まれのクロード・シャブロール監督も、今や76歳、1930年生まれのクリント・イーストウッド監督は、最近『ミリオンダラー・ベ

イビー』(04年)や「硫黄島2部作」(『父親たちの星条旗』(06年)、『硫黄島からの手紙』(06年))などで圧倒的な存在感を示しているが、それに負けじとフランスのクロード・シャブロール監督も、円熟期に入ってなお、いかにもフランス映画らしいファミ・ファタール映画を完成させたというからビックリ。しかもそのネタは、これまた1930年生まれで、世界的に有名なイギリスの女流ミステリー作家ルース・レンデルの『石の微笑』(89年)というから驚き。

やはり、いくつになっても異性に対する興味を持つことが、若さを保ち、人生を楽しむ秘訣……？

ローラ・スメットの血統の良さは、寺島しのぶ並み……？

私は特別ゴダール監督やトリュフォー監督などのフランス・ヌーヴェル・ヴァーグ監督に詳しいわけではないが、それなりに興味はもっており、山田宏一氏の『フランソワ・トリュフォー映画読本』(03年)を購入して折りに触れて読んでいる。その本の中に「女は魔物(マジック)か？」という項があり(592頁)、そこでジャンヌ・モローやカトリーヌ・ドヌーヴについて書いていることは私にも十分理解できるもの。しかしそこで書かれているナタリー・バイについては、私は全く知らなかった。

しかるところ、この映画で魔性の女＝ファミ・ファタール役として登場する、自称俳優の卵センタ役を演ずるローラ・スメットは、このナタリー・バイと名俳優ジョニー・アリデーとの間に生まれた娘とのこと。この2人がフランスの俳優陣の中でどのランクに位置するのか私は知らないが、トリュフォー監督やゴダール監督のファンなら決して忘れられないというナタリー・バイの娘なら、演技力がしっかりしているのは当然。

プレスシートによると、1983年生まれの彼女は、2003年の初出演映画でセザール賞にノミネートされるなど、今後最も期待されている新人女優の1人らしい。他方、2007年2月26日に結婚してしまった尾上菊五郎と富司純子の娘寺島しのぶは、最近『愛の流刑地』(06年)で大胆なベッドシーンを披露したが、長年舞台上で活躍していた彼女が映画で大ブレイクしたのは『赤目四十八瀧心中未遂』(03年)。そう考えるとローラ・スメットは20代前半頃の寺島しのぶに相当する、血統書つきの名女優ということになるのかも……？

そうだとすると、一瞬とはいえ、そんな女優のヌードシーンを拝むことができたの

は超ラッキー……？

幸せそうな家族だが……

今日は、夫に先立たれた母親クリスティーヌ（オーロール・クレマン）が子供たちに新しい恋人ジェラルド（ベルナル・ル・コク）を紹介するべく、長男フィリップ（ブノワ・マジメル）、長女ソフィー（ソレーヌ・ブトン）、次女パトリシア（アンナ・ミハルシア）と共にジェラルドの自宅を訪れる日。3人の子供たちはみんなそれぞれ大人だから、母親の新しい恋人や結婚をそれなりに認め、祝福するつもりだが、何となくギクシャクした感じも……。とりわけ、庭においてあった「フローラ」と呼んでいる石の彫像をお土産にもって行くという母親の提案について、フィリップは少し不満そう。

ジェラルドの自宅は立派だし、愛車ジャガーも立派だった。また、一緒に食事した近くのイタリアレストランも良かった。ところが、さかんにジェラルドの印象はどうだったと気にするクリスティーヌに対する子供たちの言葉を聞けば、ジェラルドに対する評価はイマイチだったよう。

一見、お互いの気持を認め合い、大人の関係を保っているように見える幸せそうな家族だが、そんなやりとりの中、何かのきっかけがあればすぐに壊れそうな雰囲気を感じたのは私だけ……？

長男、長女はまともだが……？

こんな兄、姉、妹の場合、1番下の妹がわがままに育つのはやむをえない……。長男フィリップはハンサムでナイーブ、そして母親思い、家族思いで仕事にもまじめな典型的な長男タイプ。ちなみに、テレビニュースで流れている港での凄惨な殺人事件の報道を2人の妹たちは興味深く見ていたが、フィリップはそんな映像を見るのも嫌いなよう。

次に、ジャッキー（エリック・セニエ）との結婚式を数日後にひかえている長女ソフィーは、今結婚式のことで頭がいっぱいだが、これまた公務員の夫ジャッキーとの平凡な家庭生活にドップリ浸れそうなタイプ。

しかし、末娘のパトリシアは、鼻にピアスをしていることを母親に注意されると「これが私流なの」と反論したり、フィリップに「100ユーロ貸して」とねだったのに

20ユーロしか貸してくれないと「ケチね」とイヤ味を返すようなわがまま娘のよう。こんなタイプの女はきっと何か問題を起こしそうだと思っていると、案の定、後半このパトリシアが万引きで逮捕されたという連絡が入ってくる中、フィリップは大変な騒動に巻き込まれることに……。

運命の出会い、妹の結婚式から……

母親やその恋人への接し方、またインテリアデザイナーとしての働きぶりを見ると、フィリップはきわめて真面目な常識人のようだが、思い出が詰まっている「フローラ」にえらく執着している姿を見ると、やはり心のどこかに通常ではないものがあるのかも……？ ちなみに、フィリップの女性観は明確ではないが、どちらかというとその方面は疎く、積極的ではなさそう……。

そんなフィリップが運命のファム・ファタール、センタ（ローラ・スメット）と出会ったのは、センタが妹ソフィーの結婚式で花嫁付添い人をしていたため。ソフィーの結婚相手ジャッキーのいとこだと紹介されたセンタとフィリップは、目と目を合わせた瞬間運命の出会いを感じとったよう。

フィリップから「送っていこうか」と声をかけられた時は、「1人で帰るから結構よ」と返事したセンタだったが、雨が降りしきる中、ノックされた自宅のドアをフィリップが開けると、そこにはパーティー衣装のままずぶ濡れになったセンタの姿が……。 「バスルームを貸して」「とにかく着替えなきゃ」、そんな会話は、その後激しく燃えあがる2人の姿を予感させるもの。しかして、そこで見せるローラ・スメットの体当たり演技は超見モノ……。

今風そしてセンタ流の「4つのお願い」とは……？

『喝采』は1972年に日本レコード大賞を受賞したちあきなおみの名曲だが、彼女には『四つのお願い』という面白い曲がある。これは彼女が彼氏に対して「4つのお願いを聞いてくれたら、私はあなたに夢中よ」と語りかけるもので、それは1つ「やさしく愛して」、2つ「わがまま言わせて」、3つ「さみしくさせないで」、4つ「誰にも秘密にしてネ」というたわいもないもの。

ところがこの映画では、今風のそしてセンタ流の4つのお願いがフィリップに対し提示される。そしてそれが、この映画をサスペンス映画の巨匠アルフレッド・ヒッ

チコック監督ばりのサスペンス色を際立たせていくことに……。

その4つのお願いとは①木を植えて、②詩を書いて、③同性の人と寝て、④誰でもいいから人を殺して、という奇妙なもの。もちろんここで最大の問題は、4つ目のお願いだが、フィリップのような常識人にはこんな脈絡のない突拍子もないお願いは冗談半分としか考えられないもの。ところがセンタは……？

「愛する男のためなら、何でもする」、それが女の愛情表現の最高峰なのだろうが、そこまで言われると、男にとってはかえって重すぎて怖い面も……？

そんなコト言わなきゃいいのに……

激しく愛し合う若い男と女が1度セックスを体験すると、その後は会うたびに「何はともあれベッドへ」ということになるのは当然。面白いのは、コトが終わった後の2人の会話だが、それがフィリップとセンタの場合はかなり異様……？ まず最初の大変な行き違いは、フィリップの男としての見栄から……？

センタが住んでいる家の庭には、センタが嫌っている浮浪者（ミシェル・デュショールソワ）が住みついていて、ある日彼がいなくなると同時に、港で浮浪者が殺害されたとのニュースが流れた。そこでフィリップは「あれは、君のお願いを聞いてボクがやったのサ……」と説明したのだが、それがマズかった。つまり、そんな愛情あふれるフィリップの行為に感激したセンタは、今度はフィリップのために殺人のお返しをしなくちゃと考えたらしい。しかし、そのターゲットは……？

フィリップの説明はあやふやだが、センタの報告は……？

センタから浮浪者殺害の様子を聞かせてくれと迫られても、フィリップにはそれができないのは当然。したがって、「あまり話したくない」と逃げたのは賢明だが、逃げることができたのは、警察の追及ではなくセンタからの追及だったから。しかし、センタのお願いをすぐに聞いてくれたフィリップの行動が、すなわちフィリップのセンタに対する愛情の証だと信じているセンタは「自分もお返しをしなければ……」と考えた様子。

何度も言うように、フィリップは常識人だから、あまり人の悪口は口にしない人間。しかし、せっかく母親と妹と共にジェラルドの家を訪問したのに、その後電話も入れてこないジェラルドの誠意を疑い、ジェラルドに失望したのはやむをえないところ。

また自宅を売却したらしいのに、せっかくプレゼントしたあの愛着のある「フローラ」を放置したままというのは、フィリップにとって到底許せないこと。そんなジェラルドに対する不満やうらみごとを、フィリップはセンタに対して知らず知らずの間にしゃべっていたらしい。

そんなフィリップに対して、センタは「ジェラルドを殺しに行ってたの」とあっさり説明したからビックリ。しかも、その説明は具体的かつ詳細なもので、臨場感タップリ……。フィリップのために人を殺してきたことを恍惚とした表情でしゃべり続けるセンタは、ひょっとして精神異常者……？ そして常識人のフィリップは、さてこれからどんな行動を……？

魔性の女の本性が少しずつ……

センタを演ずるローラ・スメットの血統の良さは前述したが、この映画はセンタの魔性ぶりが最大のポイントだから、彼女の責任は重大。私の乏しい過去の女性遍歴から考えても、突然突拍子もないことを言い始めるオンナは手がかかるけれどもその魅力的……？

その点センタは、そもそも最初の身の投げ出し方からみても異様かつ大胆であったうえ、日々濃厚なつき合いが始まったのに突然部屋からいなくなったり、会うと突然海に連れて行ってとねだったり、さらにはケンカ別れして出て行ったフィリップの帰りを1人でじっと待っていたり、とやることなすことがエキセントリック。そのうえ魔性の女にふさわしく、1つ1つの行動には重みがある……？

しかし、「私を愛しているなら誰でもいいから人を殺して……」と頼まれているのが本気だと気づくまでに時間がかかるのは当然だし、逆に気づいた時は既に遅いのも当然。そんなセンタでも、愛してしまったものは仕方ない。

ホントはそんなセンタの魔性ぶりを知ったフィリップは彼女から逃げ出したかったのかもしれないが、彼はそうしなかったのは立派。また、これはやはりフィリップのまじめで常識的な考え方を前提としたものであり、「絶対ここに住むの」というセンタの強い信念を変えることができなかったのは当然。センタは人気のない大きな洋館の地下に住んでいたが、結婚後は使っていない3階の広い部屋で一緒に生活することになっており、フィリップはその改装の提案までしていた。しかし今日、センタと一緒に入った3階の部屋の中には、恐るべきものが……？



© Moune Jamet

警察の捜査はどこから……？

センタの告白を聞き、自分のインチキな「告白」とは違ってそれが本物だと悟ったフィリップが慌てたのは当然。そんな時、フィリップのケイタイに警察からの電話が入ってきたから、一瞬フィリップはヒヤリとしたはず。しかしその電話は、幸いなこと(?)に末の妹パトリシアを万引きで逮捕したから、警察に来てほしい旨を告げるものだった。こうやってヒヤヒヤさせたり、ひと安心させたりするのがフランスのヌーヴェル・ヴァーグ流……？

パトリシアの万引きはちょっとしたお小言で終了しそうだったが、それとは全く別の、ジェラルドの家の中で2週間だけ生活していたジェラルドの親戚の男の殺人事件について、フィリップに対して質問が。センタが殺したと告白していたジェラルドと彼の家の前で偶然出会ったフィリップは、センタの話が冗談だったと安心していたのに……。

また偶然は重なるもので(?)、港で殺されたはずの浮浪者にもフィリップは公園でバッタリ出会うことに……。何と、彼は入院していたが、またセンタの家の庭に戻ってくるかも……？しかし、そんなことをされたら大変。だって、フィリップがセンタに話した愛の証がウソだということがバレてしまうから……。

さあ、フィリップはどんな行動をとるべきか、その選択は急を要することになってきたが……？

あれも伏線……？ これも伏線……？

フランス映画は、『死刑台のエレベーター』（57年）にしても『太陽がいっぱい』（60年）にしても、解説調ではなく、暗示的なラストで終わることが多い。したがって映画が終わってから、「ああなるほど、あれはそういう意味だったのか」と納得し、映画の出来に感心することが多い。フランスのヌーヴェル・ヴァーグ監督の生き残りであるクロード・シャブロール監督は、この映画でも当然そんな手法を意識して多用している。

たとえば、映画の前半に紹介されていた、港で浮浪者が殺害されたとのテレビニュースやジェラルドの誠意のなさや家の引っ越しなどのシーンが後半になって大きな意味をもってくることに……。さらに、フィリップが異様に執着している石の彫像フローラの意味も……。

あれも伏線、これも伏線、と思いつつ観ていると疲れてくるから、そんな鑑賞法はお薦めできないが、少なくともこの映画に限っては居眠り厳禁で、それなりに身構えて観る必要があるのでは……？

2007(平成19)年7月6日記